

INTERVIEW

伊東市民病院 管理者
川合耕治 先生



人を育てる病院でありたい

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

地域医療振興協会との接点

山田隆司(聞き手) 今日は伊東市民病院に川合耕治先生をお訪ねしました。先生は2年前に伊東市民病院の管理者に就任されたわけですが、まずはここに至るまでの経緯を紹介していただけますか。

川合耕治 私は昭和59年に自治医科大学を卒業しました。山梨県の7期です。初期研修は山梨県立中央病院で、初期研修修了後は河口湖にある250床の山梨赤十字病院へ行きました。

山田 そこには自治医大の卒業生はいたのですか。

川合 外科に1人いて、私が2人目でした。

山田 山梨日赤はへき地勤務とみなされたのですね。

川合 そうです。山梨県は、富士五湖の方を郡内、甲府盆地を国中と言うのですが、郡内はへき地だと

いうイメージだったのですね。訪ねて来たほかの県の卒業生から「ここはへき地ではない」と言われましたが。

山田 そこには何年いたのですか。

川合 4年です。その後、身延町早川町組合立飯富病院という100床くらいのところに3年行きました。そこは内科医が3人でした。

山田 100床で内科医3人というのは、自治医大の卒業生が赴任する典型的な規模の病院ですね。

川合 私が行ったときは、内科医3人が全て自治医大の卒業生でしたね。そういうわけで、義務年限は全て病院でしたが、そこで9年の義務が明けて、それから初期研修病院だった県立中央病院の消化器内科に誘われて行きました。そこで

は自治医大卒業生の初期研修医の面倒をみるという役割もありました。

山田 では卒業生の指導医として研修病院に戻ったということですね。

川合 そうですね。卒業して以来、小池宏明先生にいろいろ指導を仰いでいて、小池先生が私の理想的な医師像だったので、義務年限明けのキャリアなどについても小池先生に相談して……。

山田 初期研修のころから小池先生とは関わりがあったのですか。

川合 はい。山梨日赤では内科医師が6,7人いましたが、外来で分からないことがあると、患者を前にして「今こういう患者さんがいるのですがどうしたら良いですか?」と小池先生に電話をしながら診療した覚えがあります。

山田 (笑)そうすると研修医のときのメンターのようなものです。小池先生とはどのような接点があったのですか。

川合 初期研修の県立中央病院の指導医が小池先生の面倒もみていたのですが、私のことも可愛がってくださいって、そんなつながりです。

山田 なるほど。県立中央病院に戻ってからは何年いたのですか。

川合 それ以来十何年いました。それで伊東市民病院の話が起きたのです。

山田 先生と協会とはどういうつながりがあったのですか。

川合 私が山梨日赤にいた時に、山梨県都留市の施設の管理委託の話が出てきたのです。協会の吉新通康理事長と和座一弘先生が都留診療所に赴任されていて、近かったからしょっちゅう遊びに行っていたのですよ。

山田 理事長と接点があったのはどうしてですか。

川合 その都留の話の時からです。「都留診療所を市立病院にするという話があり、指定管理を受けて山梨県人会中心でやる夢がある」という理事長の言葉に、当時の県人会の代表の小池先生が「それは素晴らしい話だ」と乗ったのです。結果的にはうまくいかなくなって、小池先生は相当忸怩たる思いがあったと思います。それで共立湊病院で理事長から小池先生に声がかかった時に、小池先生は二つ返事で飛んで行ったのです。そういうのを私は見ていたのです。

山田 なるほど。そうすると先生が河口湖にいた時に都留診療所の話があって、県の卒業生がまとまるのだったら非常にいい話ではないかということで、小池先生中心に準備したものの結局うまくいかなかったということですね。その件は実現しなかったけれど、人材的には協会とのつながりができ、それはそれで良かったという気がします。

川合 そうなのです。私はいつも「理事長は都留では失敗したけれど、小池先生を持っていったのだから最高でしょう」と言っています。小池先生が湊病院へ行かれた時には本当にびっくりしましたよ。当時小池先生は塩川病院の院長でしたし、誰も何も聞いていなかったのです。でもそういうものなんだなと思って。それで私が県立中央病院に10年以上いたのですが、ある時、忘れもしませんよ、甲府のデニーズに小池先生に呼ばれて、「川合、伊東をやるから来てくれるよな」と言われたのです。『ああ、ここは二つ返事をしなければいけないな…』と思い、「分かりました」と返事をしました。